



本部設置から初動出動まで ～スマトラ島沖地震を思い出動急ぐ～

2011年3月11日午後2時46分に東北で大きな地震が発生した。ニュース速報で中島伸一副院長は2004年のスマトラ島沖地震を思い出した。初動で救護に行った被災地で見た、何もかも押し流してしまった津波被害の痕を。「これは大きな被害になる。72時間以内に初動の救護を始めなければ」（中島副院長）。一二三副院長と相談、会合に出かけて不在だった東院長と連絡を取り、午後4時、熊本日本赤十字に災害対策本部を立ち上げた。

インドネシアで目にした被災地の惨状を考えると大型の特殊医療救護車（ディザスターレスキュー）は欠かせない。道路事情も不明のまま現地に出すことに不安はあったが、午後5時過ぎ、ディザスターレスキュー出動の準備に入った。

地震とそれによる津波で大きな災害があったこと以外はまったく情報がなかった。スマトラ島沖地震では中島副院長と宮田昭診療部長、上木原宗一診療部長の3人が初動救護で現地に行った経験があり、状況が分からない中での救護班派遣にはその経験が役立つに違いないと、上木原部長が第1班を指揮することになった。

午後9時、第1班はランドクルーザー2台と緊急車両1台で出発した。目的地は分からず、「とにかく北を目指せ」「京都に着くころには連絡する」と。第1班に続いてディザスターレスキューや大型テントと救援物資を積み込んだウイング車、フォークリフトを積んだクレーン車、ドクターカーからなる第2班も12日午前零時に出発した。当初目的地に考えられていた福島には救護班が多数駆けつけていた。仙台から「石巻がひどいらしい」との情報があり、12日の時点で本社を介して石巻に連絡がついた。石巻赤十字病院は高台にあり直接津波被害はなかったものの周りは被害を受けており、避難者が殺到して水・食料・医薬品があと2日しかもたないという。救護班の目的地が決まった。



中島伸一副院長

運よく東北に向けて帰る予定のトラックが見つかり、救援物資輸送用の10トントラック5台を確保できた。病院地下の倉庫からだけでなく県支部の倉庫にあった救援物資も積み込んだ。初動1、2班は緊急医療を想定した物資を持っていったが、大型トラック5台には慢性期の薬剤を含め、テントなど資機材のほか、日用品や食料、哺乳瓶やお年寄りの介護用品など。なにもかも津波に流されてしまった避難者に必要と思われる生活物資を積んで、トラック5台は翌12日午後5時に熊本を出発した。また、テント用に暖房機を持って行ったが、燃料を現地で調達できなかったため熊本からトラックに燃料を積んで輸送した。

熊本からの輸送はこの後も13日午前10トントラック1台、14日午後4トントラック3台、16日午後4トントラック2台、23日朝4トントラック2台と続く。熊本から送った物資はおよそ90トンに上った。

連日報道される被災地の様子や繰り返し放送される津波被害の映像。多くの熊本日本赤十字スタッフが救護派遣への参加を希望した。スケジュールを合わせるため、病院医師のリストを作って配布し、派遣に応じられる日を書き出してもらい調整した。現地の状況に合わせて看護スタッフに保健師や助産師を加えたほか、現地のニーズにこたえるため、管理要員枠に臨床工学技士を加えての班編成も行った。

救護派遣では医師・看護師だけでなく管理要員は欠かせない。特に大型車の免許を持つ「ブルーガイズ（技術要員）」は大型車の運転やテント等設営からカルテの管理、救援物資管理、巡回地の調査など、色々な仕事をこなした。ディザスターレスキューを展開しての仮設診療所開設や避難住民のための暖房付きの大型テント設置も行った。

現地の救護活動は5月に入って牡鹿半島の巡回診療に移った。被害の大きかった地域で、危険地帯も多く残っており、随所で自衛隊に立ち入らないよう制止さ



チャーターした10トントラック(上)と救援物資の搬出(右)



れた。救護を求めている人のところへ行って助けたいけれど、行くことができないというのは、救護班員にとってはストレスだった。

帰熊後「自分は被災地の人たちのために精一杯出来ただろうか」と悩むスタッフが数人いた。PTSDだ。現地の、家が流され食べ物も乏しく、電気もガスもない避難所の人たちの中で一生懸命救護活動をして、帰ってきて普通の生活に戻ると、そのギャップで被災者に申し訳ないような気持ちになる。被災地救援の参加者のなかで1%くらいがそんな悩みを抱えるという。その悩みを聞いてしっかり受け止めるカウンセリングが、東日本大震災の救護派遣でも必要だった。これを受け3月28日午後、思い悩む救護派遣者を対象とした茶話会が開かれた。

石巻への救護活動には5月31日までで、日赤熊本の単独派遣として28班210人、日赤本社からの要請派遣も21人が派遣された。熊本赤十字病院だけでなく日赤熊本県支部、日赤熊本健康管理センター、熊本赤十字血液センターからも参加した。